

鴨長明の「方丈」再考

張 利 利

要 約 『方丈記』の「方丈」について、「長明が一丈四方の居室の家を造ったのは維摩居士の居室に倣った」、「維摩居士が方丈笏の狭い室に住んだ故事による」等、という解釈があるが、諸解釈はほぼ一致している。つまり、長明が『方丈記』の文末に「栖はすなはち浄名居士の跡をけがせりといへども」とあるので、「方丈」は維摩居士と其の居室を模倣しているというのである。「方丈」は『方丈記』の主題と作者の居室として、作者意念を込めた重要なポイントの一つであると考えたいと思う。本論では、この「方丈」についての再考を通して、『方丈記』の作者の住居としての意念を探究した。

伝説では維摩居士の居室は一丈四方であるが、容量は無限であった。この故事から、方丈は禅宗の住職の居室の名となり、後には住職の呼称にもなった。先行文学の『白居易集』では「一床方丈」・「方丈若能来問疾」・「酒肆法堂方丈室」を用いて、それぞれ自分の寢室と禅僧と座禅する場所に譬える。『懐風藻』の「遊

吉野宮」は「此地即方丈、誰説桃園賓」とあって吉野宮を理想の郷だと、「方丈」を用いて比喩している。長明は自分の住居に対して、「仮の宿り」等のように表現している。日常生活に於いて、気の向くままにしてもよい、一番落ち着いて暮らし、生活に不足する事の無い場所などを説明し、更に「魚」と「鳥」の求めることを用いて自分の閑居の生活の良さを、力強く説得している。即ち、長明の「方丈」の居室は維摩居士の居室に習ったというに止まらず、住む場所として面積が狭いが、彼の精神的解放と自由な生活が得られる一番理想的な住居であり、彼の追求している「静かなる」「憂へ無き」の住居である。「方丈」は作者の意念に於いて、自分の隠遁生活に合う、理想の住居の譬えとも言える。

鴨長明は、自分の隠遁生活の住居を、「広さはわづかに方丈、広さは七尺が内なり」と、又、「仮の宿り」、「この所」、「仮の庵」というように表現している。住居の特定の名がないので、仮に彼の住居を「方丈」の居室と呼ぶことにしよう。この「方丈」の語については、従来、解釈がほぼ一致しているが、次のようである。

方丈 起りハ、佛在世の時、維摩詰妙喜国より、此土に来、毘

耶離大城の中におゐて、常に一丈四方の室に入、かりに病にふし、訪ひ来るものおして、身のやまひを以、ひろく為に説法度生し給ふ。其時釈尊、文殊をして、維摩のやまひを訪ひに、つかハし給ふとかや。維摩経曰、爾時長者維摩詰問文殊師利曰、仁者遊於無量千萬億阿僧祇國。何等佛土有好上妙功德成就師子之座。文殊師利言。居師東方度三十六恒河沙國、有世界。名頂弥相。其佛号頂弥燈王。今現在。彼佛心長八万四千由旬。其師子座高八万四千由旬。於是長者維摩詰現神通力即時彼佛遣三万二千師子座高廣嚴淨來入維摩室。乃至其室廣博悉苞容三万二千師子座無所防闕。於毘耶離城及閻浮提四天下亦不迫迫。云云猶くわしくハ、しるすに暇なし。

(撰陽山人著『方丈記諺説』巻頭)

築瀬一雄は、「長明が一丈四方（ほぼ四畳半一室の広さ）の家を造つたのは維摩居士の居室に倣つたので、そのことは第三十六章に「栖はすなはち、浄名居士の跡をけがせりといへども」と記しているの、明らかである」^{①注}と述べている。

富倉徳次郎は方丈について、「方丈 一丈四方の室。維摩居士が方十笏の狭い室に住んだ故事による」^{②注}と注釈している。

右のように、「方丈」について、諸解釈はほぼ一致している。

即ち、長明が『方丈記』の末文に「栖はすなはち浄名居士の跡を

けがせりといへども」とあるので、「方丈」は維摩居士とその居室を模倣しているというのである。「方丈」は、『方丈記』の主題と作者の居室として、作者の意念を込めての重要なポイントの一つであると考えたい。本論では、鴨長明のこの意念は何だろうか、を巡って、彼の「方丈」に対して、従来の研究を踏まえて、再考を通して長明のその意念を探究したい。

「維摩」（梵語維摩詰の略）は、維摩経の中心人物である。彼は（ヴィマラキールティ。北インドの）ヴァイシーリーに住む富豪であり、大乘仏教の奥義に達した在家の居士である。本経の内容は、「ありとあらゆる人々が病む限り、私もまた病み続ける」という大乘仏教の慈悲の精神に基づく病に罹る維摩を、文殊を始めとする多くの菩薩が見舞いに訪ね、問答を交わす形式で展開して行く。その中で、彼は般若の空の観点を立ち、ものの自性（実体性）を主張してそれに執着している旧仏教を徹底的に批判する。そして、空の境地に達する時、在家と出家との区別・対立もなくなり、「煩惱の大海に入らなければ一切智の宝は得られない」という「煩惱即菩薩」の思想や仏道の実践は深山に入るのではなく、日常の行いのうちにこそあるという「生死即涅槃」の思想を強調する^{③注}。伝説では、維摩居士の居室は一丈四方であるが、容量は無限であった。釈尊時代に在家者という。無垢称、浄名等

とも意識される。維摩経は大乗仏典の一つ。唐の玄奘訳が現存である。在家信者維摩が偏狭な仏弟子を啓発し般若の空観によって不可思議の解脱の境涯を得、一切方法を悉く不二の法に帰することを、優れた戯曲的手法を以て説いたものである。この故事から、方丈は禅宗寺院の住職（寺主）の居室の名となり、後には住職の呼称になった^{④註}。又、師への敬称としても用いられる。

『方丈記』の文を見ると、長明は、自分の居室を、「末葉の宿り」・「旅人の一夜の宿」・「その所」（のさまをいはば）・「この所」（に住むはじめ）・「仮の庵」と称して、特定の名がないと見られる。「方丈」というのは、居室の広さを説明しているのが主な趣旨であると思われる。築瀬一雄は「維摩居士の居室にならった」^{⑤註}と主張している。又、武田孝は、「ここで、長明が、自分の庵を「方丈」と称しているのは、謙遜または誇張の気持ちがないとも言えない」^{⑥註}というのであるが、「栖はすなはち浄名居士の跡をけがせりといへども」の後文に、「たもつところはわづかに周利槃特が行ひにだに及ばず、もしこれ貧賤の報のみづから悩ますか、はたまた妄心のいたりて狂せるか。」とあって、長明は自身の修行精神が足りないと反省していると共に、貧賤の報いで心が痛んでもいるか、それとも、妄心がやって来て、自分を狂わせているのか、と自問している。従って、長明の「方丈」の居室は、

維摩居士の居室を模倣するだけではなく、彼が求めている隠遁生活の一つの場所であると共に、維摩居士の居室を用いて、自分の居室に対する譬えの意を示していると思われる。自分の居室を方丈に譬えることは先行文学時代にもあった。この譬えについて、『白居易集』^{⑦註}には割合多く見られる。関係作品を幾つか挙げて見たい。

其の一

答閑上人来問「因何風疾」（卷三十五・七八八頁）

閑上人来り何に因つてか風疾すると問へるに答ふ

一床方丈向陽開、

一床方丈陽に向ひて開く、

労働文殊問疾来。

文殊を労働して疾を問ひ来たる。

欲界凡夫何足道、

欲界の凡夫は何ぞ道ふに足らん、

四禅天始免風災。

四禅天は始て風災を免る。

閑上人（仏僧の名）が病氣見舞いに来て、何故に中風等に罹ったかと問うに答えた詩である。日当たりのよい方丈の室に床（ベッド）を設けて寝ているところへ、文殊上人が見舞いに来てくれた。何故に中風になったかとの尋ねであるが、欲界の凡人だからこそ、こんな病気に罹ったので、四禅天であって、始めて風災を免れるのである。ここの「一床方丈」は自分の寢室を、維摩居士の居室を用いて比喻するものである。

其の二

齋戒満夜、戯招夢得（卷三十三・七四八頁）

齋戒の満つる夜戯れに夢を招く

紗籠灯下道場前、

紗籠灯下道場の前、

白日持齋夜座禪。

白日持齋して夜座禪す。

未復更思身外事、

復更に身外の事を思ふこと無し、

未能全尽世間縁。

未だ全く世間の縁を尽くすこと能はず。

明朝又擬親杯酒、

明朝又杯酒に親むことを擬す、

今夕先聞理管弦。

今夕先づ管弦を埋むることを聞く、

方丈若能来問疾、

方丈若し能く来つて疾を問はば、

不妨兼有散花天。

兼ねて散花の天有ることを妨げず。

灯籠を点じた仏殿に、昼は齋戒し夜は座禪したので、更に身外の事に心を奪われるような事はなくなつたが、然し未だ全く俗縁を絶ちきつたという訳には行かない。明朝は齋戒の期限が満つるので、又久しぶりで一杯きこしめそうかと思つている。現に今夜は早くも管弦の音を聞いた。もし方丈が我が病を見舞ってくれるならば、美人を携帯せられても苦しくない、という。この「方丈」は、禪の僧を指していると思う。

其の三

拜表廻閑遊（卷三十一・七一一頁）

表を拝し廻りて閑遊す

玉珮金章紫花の綬、

紵衫藤帯白綸巾、

紵衫藤帯白綸巾の中、

晨興拜表称朝士、

晨に興きて表を拝して朝士と称し、

晚出遊山作野人。

晩に出で山に遊びて野人と作る。

達磨傳心令息念、

達磨心を傳へて念を息めしめ、

玄元留語遣同塵、

玄元語を留めて塵に同ぜしむ、

八關淨戒齋銷日、

八關の淨戒齋して日を銷し、

一曲狂歌醉送春。

一曲の狂歌酔ひて春を送る。

酒肆法堂方丈室、

酒肆法堂方丈の室、

其の間豈是兩般身？

其の間豈に是れ兩般の身ならんや。

上書して自宅に帰り更に閑遊したことを述べた詩である。詩意は、次のようである。玉珮や金印紫綬を帯びて、紵衫藤帯を着て白綸の帽を戴き、夙に起きて朝士として上書し畢り、夕に野人として閑遊する。達磨は俗念を止めよと教え、老子は俗と伍せよと教えている。因つて、余は或いは八關齋を守つて日を送り、或いは酔歌して春を過ごしている。酒屋にいる時の我も同一の楽天居士である。この「方丈」は座禪する室を指している。作者の自分の信仰心を比喻しているのだろう。

右の詩から見れば、作者の仏教と禪宗と道教に対する信仰の傾

向が何れも表されている。特に右の其の三には、「晨に興きて表を拝して朝士と称し、晩に出で山に遊びて野人と作る」とあって、「中隠」という隠遁生活の態度が見られる。又、彼の居室（酒を飲むことと説法することを兼ねている室）を方丈に見なして、閑居の楽しみのある場所でもありと表現していると思われる。

長明が自分の居室の大きさを「方丈」だと言って、居室は方丈室とも言えるだろうが、「いはば旅人の一夜の宿を作り、老いたる蚕の繭をいとなむがごとし」とあるので、方丈室は、自分の老後生活の場所に過ぎないと強調しているのである。長明の老後の生活地である方丈室は彼にとつてどのような役割を持っているかについて、次のように幾つかの点を挙げて見たい。

○ もし念仏ものうく、読経まめならぬ時は、みづからおこたる。さまたぐる人もなく、また、恥づへき人もなし。ことさらに無言をせざれども、独りをれば口業を修めつべし。

必ず禁戒を守るとしもなくとも、境界なければ何につけても、破らん。

もし念仏を唱えるのがおつくうであつたり、まめまめしく読経もする気にならぬ時は、自分から休み、自分勝手に怠る。それを邪魔する人もいないし、またそれを恥じなければならぬ相手もない。わざわざ無言の行をするわけではないけれども、独りで居れ

ば、口による罪を犯せないですませよう。仏の禁じられた戒めをことさらに守ろうと努力しなくても、そのような環境がないのだから、何によつてその禁戒を破ろうか。即ち、自分の居室は、仏道修行の活動を気の向くままにしてもよいという、他人の事を気にする必要のない場所であると考えていることが表されている。

○ 芸はこれつたなけれども、人の耳をよるこぼせしむとはならず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから情をやしなふばかりなり。

技がうまくないが、（琵琶を弾いて）人に聞かせて喜ばせようというのではなく、独りで弾き、独りで歌つて、情操と教養を養うとするだけのことである。琵琶を弾き歌う場合、この居室は、自分の精神的修養、或いは高い情操を持つように心を養う場所であると考えていることが表されている。

○ ただ仮の庵のみのだけくしておそれなし。ほど狭しといへども夜臥す床あり、昼ある座あり。一身を宿すに不足なし。ただこの仮の庵だけは、落ち着いて暮らせて、心配することがない。「仮の庵」という居室は、一番落ち着いて暮らせる平安な場所であると考えていることが表されている。

○ 今、さびしき住ひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出てて身の乞匄となれる事を恥づといへども、

帰りてここにをる時は他の俗塵に馳する事をあはれむ。

今、私は寂しい住居、一間の庵に住んでいる。自分はこれが大変気に入っている。たまたま都に出掛けて、我が身が乞食となつてゐることを恥ずかしく思うが、帰つてきて、ここにゐる時は、世俗の人々が名利等にひかれて、あくせくと走り回つてゐることを哀れんでゐる。名利地位を求める為に、あくせくと走り回つてゐる人々こそ、気の毒であると、この隠遁生活の居室が教えてくれた場所であると考えてゐることが表されてゐる。

○ もし人この言へる事を疑はば、魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればこの心を知らず。鳥は林をねがふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の気味もまた同じ。住まらずして誰か悟らん。

世の人、もし私の言つてゐることの真偽を疑うならば、魚と鳥のありさまを見るのがよい。魚は水に飽きることはない。その気持ちは魚でなければ分からない。鳥は林にゐるのを願う。これも鳥でなければその気持ちは分からない。閑居の味わいもまたこれと同じである。住んで見なければ、誰にその良さが分かるか。長明は魚と鳥の例を取り上げて、自分の閑居の生活の場所の良さを力強く説得していると同時に、その住居者でなければ、その住居の良さが分かるものだろうか、自分の生活場所の素晴らしさが、

体験できない人に分かるはずはないと考えてゐることが表されてゐる。

右のように、長明にとつての「方丈」室の住居としての役割は、次のように纏めて見る事ができる。

- ① 念仏読経という仏道修行を、気の向くままにしてもよい場所である。つまり、他人がいないので、怠ける時があつても、気にすることがない。
- ② 自分の情操を養う場所である。
- ③ 狭いけれども、一番落ち着いて暮らし、生活に不足することのない平安な場所である。
- ④ 名利を捨てて世間を離れた、自分の住居がやはり良いということを、再確認することができる場所である。
- ⑤ 今の生活場所の良さは、実践者の自分しか知らない事を強調する。

右の五つを見れば、何れも隠遁生活の住居の特徴を現している。即ち、『方丈記』の「方丈」室は、作者にとつて「ただ静かなるを望みとし、憂へ無きを楽しみとす」という求めていることが実現できるただ唯一の理想の地である。彼の「方丈」室がただ一丈四方しかないが、自分の求めたいことが十分得られる。こういう意味から言えば、長明は一丈四方の居室に弟子の何千何万も入ら

れるというほどにその容量が無限である、という維摩居士の方丈室を用いて、自分の居室を比喻しているのかもしれない。しかし、「方丈」室での活動の説明を見れば、長明が一人での生活こそ、閑居の楽しみであると主張しているのが、「方丈」は、作者の創作意向に於いて、もっと深いものがあると思うのである。

「方丈」については、維摩居士に用いられるという典拠以外には、又、前述に触れたように、禪宗の住職の名とその居室の名にも用いられている。維摩居士の居室が一丈であったが、容量が無限であるという。そこで禪宗では「方丈」を、住職の室の名とするようになったわけである。仏教の「禪」についての解釈^{⑤注}によると、禪は冥想・沈思・専念と意識されるように、心の乱れを静め、三昧に住する状態をいう。仏教の開祖釈迦はインドの古くからヨーガと称する禪定の修行を仏教の修行に取り入れ継承したのである。仏教の禪の修行は現世に於いて悟りに達するための修行であり、心と身を一つに見て、苦行を否定する修行である。菩薩達磨を中国初祖とする禪宗のは「爾且みんじしほら随所に主と作れば立処みな真なり」（『臨濟録』）という思惟は、鳩摩羅什の弟子であり、天竺の仏教理論家であった後秦の僧肇のいう「真を離れ処を立つるにあらず。立所は即ち真なり」（『不真空論』）を承けたものであり、これは更に莊子の道（真理）が偏在するという中国固有の

思惟に起源をもつものである。つまり、中国禪宗とは仏教の衣を着つつ、実は莊子的な達観主義とでも名づけられる思想運動である^{⑥注}。

「莊子」に関する解釈は次のようである。

彼本来の思想を伝えて最も重要とされる内編の「逍遙遊」（第一）と「斉物論」（第二）によれば、万物一元論にたつて「無」こそ絶対普遍であり、人智を捨てて無為自然に生きることの重要さを力説している。人生観としては、死生を超越して絶対無限の境地に逍遙することを目的とし、社会観としては、あらゆる差別を捨てて絶対的自由平等を至高とし、政治論では儒家の説く禮教主義を、無為自然の思想に反する人爲として排斥した。これは、暗く険しい戦国時代の世相にあつて、現実直視と人間存在の有限性の自覚から出発して、その悲哀を超克したところに個人的解脱での逍遙への憧れが、秦漢時代には神仙思想となつてのちの道教を生み、六朝以後の中国仏教の禪の形成にも貢献した。^{⑦注}

右の解釈によれば、仏教や仏教の禪には何れも老莊思想からの影響を取り入れていることは確かである。中国の唐の時代になつてから、仏教が民間に普及するようになったと共に禪宗も盛んになった。右の触れた「神仙思想」も「方丈」との関連があるので、

少し触れたいと思う。

中国では、不死への希求を表す言葉は既に西周時代の青銅器の銘文にも見え、また、はるか遠くの土地に不死の人々の住む仙郷があるという神話的観念も早くから存在した。『莊子』には、道を体得し不死を得て天上に往来する神仙のことが、神人や真人という語で表現されている。神仙思想が特に盛んに説かれているようになるのは、戦国時代の終りころ、斉・燕の方士（方術を行う人）によつてである。彼らの説く東海の三神山（蓬萊・方丈・瀛州）の話に秦の始皇帝と漢の武帝が心を動かされ、神仙に対する強い憧れを抱いたこと（『史記』封禪書）はよく知られている。この神仙という観念は道教のなかに取り入れられ、不老長生を得て道と合一し神仙になることが、道教の究極の思想とされるようになる。健康を増進し不老長生を得るためのさまざまな養生法が説かれていたが、道教成立後、それらを継承しつつ、より体系的に得仙の方法が説かれた。^③

右の説の中に、神仙の住む所が三つあるが、中の一つは「方丈」という。『懐風藻』^④には神仙の地「方丈」を用いて比喻する作が収められている。

従四位下左中辨兼神祇伯中臣朝臣人足。

二首 年五十

五言。遊吉野宮。二首

五言。吉野宮に遊ぶ。二首

惟山且惟水。能智亦能仁。

惟れ山にして且惟れ水、能く智にして亦能く仁。

万代無埃所。一朝逢柘民。

万代埃無き所にして、一朝柘に逢ひし民あり。

風波転入曲。魚鳥共成倫。

風波転曲に入り、魚鳥に倫を成す。

此地即方丈。誰説桃園賓。

此の地は即ち方丈、誰か説はむ桃園の賓。

腎山狎鳳閣。智水啓龍樓。

仁山鳳閣に狎れ、智水龍樓啓く。

花鳥堪沈翫。何人不淹留。

花鳥沈翫するに堪へぬ、何れの人か淹留せさらむ。

中の「此地即方丈。誰説桃園賓」は、吉野の地は方丈、即ち神仙の住むようなところであるから、今さら誰がわざわざ桃園郷（仙郷）に行った客人の話をするものがあるか、という意であるが、この「方丈」は神仙の住むという海中の島（『史記』・秦始皇本紀「海中有三神山、名曰蓬萊方丈瀛州、仙人居之」）である。「桃園賓」は陶淵明、「桃花源記」に見えた故事（武陵の漁人が桃花咲く仙境に入って款待を受けた話^⑤）を用いるものである。つまり、吉野宮を理想の郷だと、「方丈」を用いて比喻するのである。作者の中臣朝臣人足の五十歳の作であるので、年代から言えば、養

老元年（七一二）以後のまもなくであると推測されている。言わば、「方丈」を神仙の住む地にして、既に日本に於いても、理想の郷と憧れの地との譬えが文学作品の中に用いられていたことは明確である。又、隱遁生活環境の特徴としての山・水、それに、陶淵明の中国の隱逸文学の代表作である「桃花源記」にも触れているので、作品の隱逸意識には道教からの影響の面影が見られるのではなからうか。

『経国集』には次のような作が収められている。

七言。忽聞渤海客礼佛感而賦之。一首 安吉人

聞君今日化城遊。真趣寥寥禅跡幽。方丈竹庭維摩室。園明松蓋寶積球。^註

「化城」は佛寺である。次の「禅跡」があつて、「方丈竹庭維摩室」は禅宗の寺を指していると思われる。注目すべきは、一句目の「遊」と二句目の「幽」は、字意から言えば、閑居の気味を表している。

右の作のように、その時代の作品の中に、「方丈」に触れる作がかなりあるが、維摩居士の居室にせよ、座禅する室にせよ、仙人の住むところにせよ、何れも作品の中に使われるのが見える。

むしろ、仙人の住むところや座禅する室を用いている例の方がもつと数多い。

先に、例に挙げた白楽天の「方丈」に関する作の中にも見られるように、其の一の、「一床方丈、陽に向かつて開く」の「方丈」は、確かに自分の居室を譬えている。「文殊を労働して疾を問ひ来る」にある「文殊」は維摩居士の方丈室に病を見舞いに訪ねて来るといふ故事の人物なので、この「方丈」が「維摩の居室の方丈」を用いて譬えられるものである。其の二の、「白日持齋して夜座禅す」は昼と夜のする事で、夜には座禅するのであつて、「方丈若し能く来て疾を問はば」の「方丈」は「人」なので、禅の住職を指している。この作は作者の日常生活を描くことが中心である。この詩から、彼の信仰傾向が見られると思われる。其の三の「達磨心を伝えて念を息めしめ」の「達磨」は、禅宗の始祖のことであつて、「酒肆法堂方丈の室」の「方丈」は、禅宗の住職の居室のことを言うのである。この作の冒頭に「晨に興きて表を拝して朝士と称し、晩に出でて山に遊びて野人と作る」とあつて、日常生活を描いていることを通して、自分の「中隱」生活の生き方を訴えている。

長明の『発心集』『道寂上人、詣長谷祈道心事』に次のような記述がある。

（前略）則、世ヲノガレ、頭ヲロシ、所々修行シケル。後ニ

ハ、飛鳥寺ノ辺ニ庵ヲ結び、座禅、念仏シテ、サシタル勤ト

テハ、小阿弥陀一返ヲヨミケル、是、同往生ヲ遂タリケル。」

元興寺の伊賀の聖である同寂という人は、道心が深く、若い頃、長谷に参り、道心をお祈りし奉る。夢中に、「道心は躰なし、只、此れの心を道心と云との給ふとぞ見たりける」と、僧が言った、という物語である。右に引いた文は物語の結論であるが、この世を離れ、庵を結び、座禅、念仏という文の「庵」「座禅」は、隠遁者の生活の内容であることを描いている。つまり、物語の主人公は日頃に念仏以外に瞑想・沈思・専念と言う座禅もする。この「座禅」と「念仏」という描き方に於いて、作者の「禅」と「仏」という両意識が何れもあると考えられる。

又、仙人について、『発心集』にも散見できる。文を挙げて見ると、次のようである。

「カクテ、帰ナントスル時云ヤワ、三月十八日ニ竹生嶋ト云処ニテ、仙人集テ、楽ヲスル事侍ルニ、琵琶ヲ引ベキ事ノ侍ルガ、エ尋出シ侍ラヌナリ。」

『発心集』「松室童子成仏事」註

右のように、長明は神仙の話をかなり作の中に使っている。つまり、彼の文学の中に、神仙意識を持つ事は確かである。

右のような「方丈」についての考察を通して、『方丈記』の

「方丈」は、従来の研究に指摘されているような、維摩居士とその居室に習ったというに止まらず、長明の精神的解放と自由な生活が得られる場所である。即ち、「方丈」の居室は、住む場所として、面積が狭いが、求めることはすべて得られる一番理想的な住居であり、彼の追求している「静かなる」と「憂へ無き」の住居である。こういう意味から言えば、長明の「方丈」は名の模倣というより、実際の内容は遙かに、その「模倣」を超えている。「方丈」は自分の隠遁生活に合う、理想の住居の譬えとも言えるだろう。

注

- ① 築瀬一雄著『方丈記解釈大成』（一六六～一六七頁）（大修館書店、昭和四七年六月）
- ② 富倉徳次郎著『方丈記 徒然草』（鑑賞 日本古典文学）第十八卷九二頁脚注四）（角川書店、昭和五〇年四月）
- ③ 今泉淑夫編集『日本仏教史辞典』（吉川弘文館、一九九九年十月）
- ④ 孟慶遠主編『中国歴史文化事典』（新潮社、一九九八年二月）
- ⑤ 注①に同じ。
- ⑥ 武田孝著『方丈記全釈』（二四九頁）（笠間書院、平成七年九月）
- ⑦ 顧学頤校点『白居易集』中華書局
- ⑧ 今泉良淑夫編集『日本仏教史辞典』（吉川弘文館、一九九九年十月）

- ⑨ 溝口雄三編『中国思想文化事典』「禅と浄土」(東京大学出版社、二〇〇一年七月)
- ⑩ 水村光男編『世界史のための人名辞典』(山川出版社、一九九一年六月)
- ⑪ 溝口雄三編『中国思想文化事典』(二九〇頁)(東京大学出版社、二〇〇一年七月)
- ⑫ 小島憲之校注『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(『日本古典文学大系』六九・岩波書店、昭和三九年六月)
- ⑬ 小島憲之校注『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(一一二頁・頭注四五)
- ⑭ 『経国集』(二八五頁) 日本文学大系第二四卷(国民図書株式会社、昭和二年十一月)
- ⑮ 『発心集』(大曾根章介ら編集『鴨長明全集』(一五八頁) 貴重本刊行会、平成十二年九月)

高松大学紀要
第 44 号

平成17年 9月25日 印刷
平成17年 9月28日 発行

編集発行 高松大学
高松短期大学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841-3255
FAX (087) 841-3064

印刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-8-10
TEL (087) 833-5811